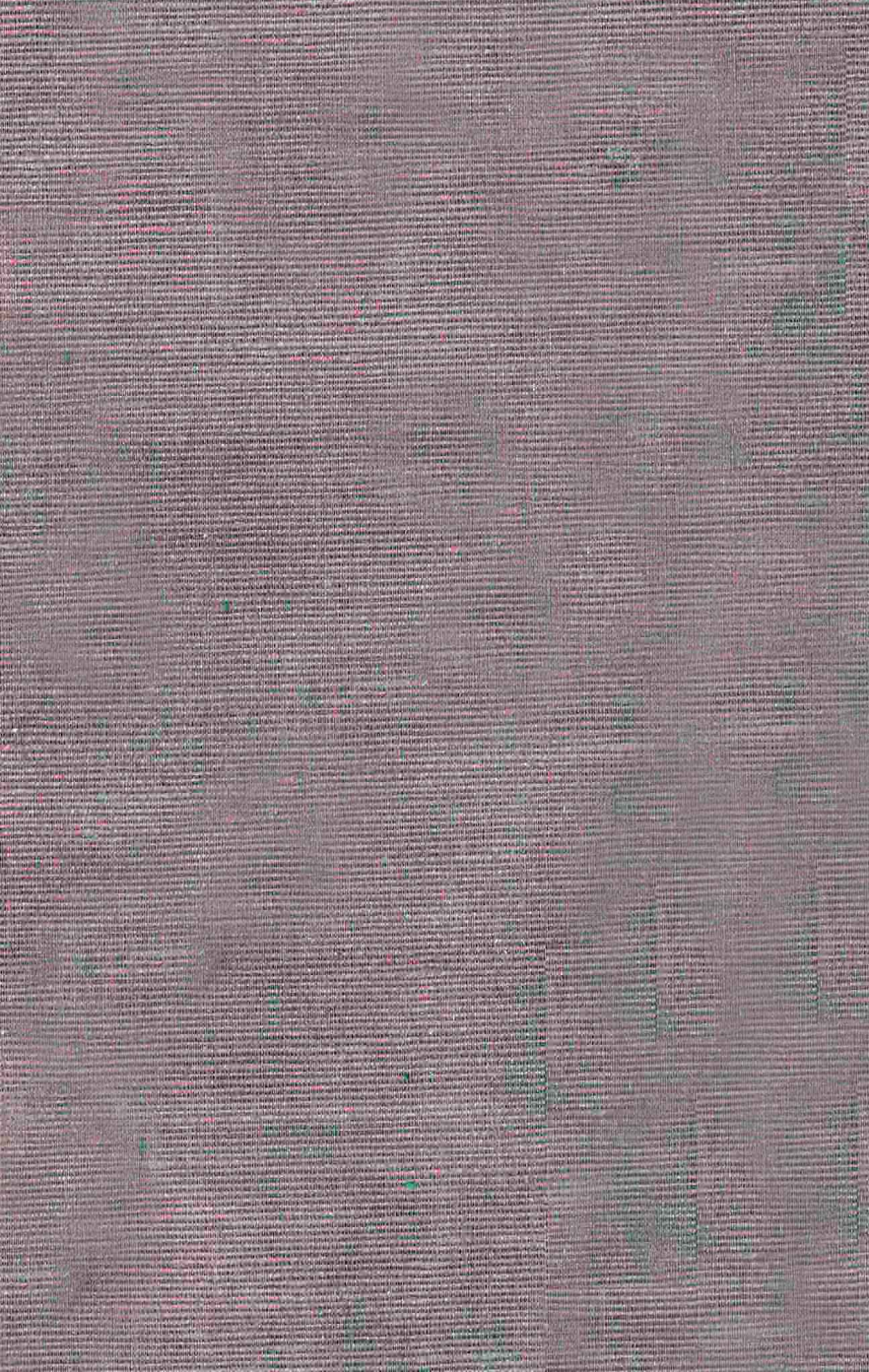




落語名作全集(第二期) 第四卷

昭和三十七年六月十五日 印刷
昭和三十七年六月二十日 発行

定価 三七〇円

発行者 八重樫 昊

印刷者 草刈 親雄

発行所 株式会社 普 通 社

本社 東京都中央区日本橋江戸橋一ノ九

電話(三七) 〇六三・八四〇・八五五

振替 東京 六四 五九三

編集室

東京都中央区日本橋通り二ノ二
電話(三七) 五五二・三九六八

落語名作全集

第 2 期 (4)

杜洛誦名作全集

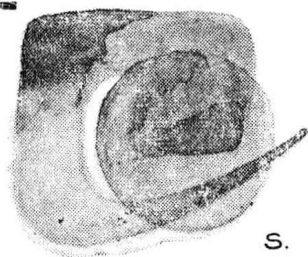
外函・装幀

江島 任

カット

中根昌司

首 屋



三遊亭圓喬 ・四代目（橋家）・

エエ、この節は実に文明開化の世の中になりましたが、その昔はカラまだ開けませんで、江戸といったところは商いなども江戸じゅうに組合何軒とか申して、その商売がきまっておりますもの。さればお商いを遊ばしまするにも、ご窮屈のような、またお楽なところがありました、いまはそうでない。なんでも新規新規と考えてやりますが、その代り向うで西洋小間物を売っておいでになり、こっちで西洋小間物を売っていても、決して古いお店のかたが、なせうちのまねをして西洋小間物を売ると、尻をもつて来ることはできません。

その昔のお話。ことごとく頓智のいいかたが、戸隠しさまのお開張に羽根を売って大そうな利益を得たことがある。すると、付け焼き刃のかたがまねをして牛の御前のお祭りにキラズを買いしめて損をしたと、腹にないことはいけません。一ぺんは江戸も血なまぐさい風が吹いたというが、いつごろが血なまぐさいというのかわかりませんが、まず慶応後でございましょうが、伏見口へ戦いがはじまった、ヤレ江戸では彰義隊が上野へこもった、ここで人が

切られた、あすこで試し切りがあつたという、実に町人は枕を高く寝ることができない。婆アさんや嫁を里方へ預けるなどというありさまだから、お旗本の二男三男、

「スワといわば飛び出そう」

というので、腕によりをかけて、自然腰のものなどは氣をつける。求めるには求めたが、

「どうも求めたが、切れ味がわからない。たしかに古刀とは見るが、切れるか切れないか……。こないだ山田浅右衛門のところへ頼んだが、切ったか切らないんだか、折り紙ばかりつけて来た。安心がならない。どうか自身で一つ試してみたいものだが、罪なき者を切るのも罪だが、ハテどうしたら試せるだろう……」

という時分、首を売って歩いたというずいぶんばからしいお話で。いずれもお屋敷さんを相手にしなければいけないのでげすから、番町あたりを大きな声を出して、首のところへふるしきをしばらくつけて

「首屋、首屋……」

「(手をたたき) 藤太夫」

「ハッ。——召しましたか」

「ちよつとこれへ来い。いまこの窓の下を大きな声をして首を商つてまいる者がある。なんの首だか知れんが、これへ呼べ」

「そりゃア栗とでもお聞きちがい……」

「イヤ、そうでない。たしかに首と申した。早く呼べ」

「ハハア。——そんなものを売りに来るやつはありやアしまい。上が聞きちがいだ。……なるほどあいっだ」

「首屋、首屋……」

「オヤ首らしい。——こりや商人商人」

「ヘイ」

「少し待て。その方、なにを売って歩く者だ？」

「私は首を売るんで」

「首ッ？ なんの首だ」

「私の首でございます」

「大変なやつだ。求めるからこつちへまいれ」

「ありがとう存じます」

お台所へ待たしておいて、しばらくたつと、

「サ、首屋、庭先へ回れ」

という。ご案内に連れられてお庭先に回ってみると、荒庭あらむしうが敷いて、手桶に水がなみなみと汲んである。そのそばにひとり侍がひかえて、殿さまは縁側にお立ち遊ばし、

「首屋。首を商あきなうのはそちか？」

「ハッ、私でございます」

「きさま、なんでそんなつまらん考えを起こしたんだ」

「さようでございます。殿さまの前でございます。が、人間わずか五十年、二十五年は寝て暮らし、人間わずか二十五年。ところで疾病やまわづらひを五年引いて居眠りを五年引き、昼寝を十年引いて飯を食うのを五年引くと、人間わずかフイになります。それよりいっそ一ト思いに……」

「なるほど、思い切りのいいやつだ。首を求めてもつかわすが、いくらだ？」

「どうかお掛け引きのないところ七両二分いただきます。どう存じます」

「首代七両二分はおもしろい。求めるぞ。金子きんすは宿元やどもとは宿

元に届けるから」

「イエ、どうぞ死んでも肌へつけておきとう存じますで……」

「さようか。しからは金を渡してやる。よく改めて受けとれ」

「ありがとう存じます。胴巻へ入れて、こう肌へつけておきます」

「そこで、なにかその方、遺言いごはないか。宿元へ申し伝えてつかわすが……」

「ありがとう存じますが、別段にいいおくこともございません」

「独身者ひとりものと見えるな。その首に巻いてあるふろしきをとれ」

「かしてまりました。こう髪びんの毛はかき上げておきます。七両二分じゃ安いもんでげす。これでも大事に使えば一代使える首だ」

「ふざけたことを申すな」

と、そばにあったる白鞆しろさやの柄つか払いをしてお庭へ降り、柄杓ひしやくで水を鐙元つばもとからかけさせると、切先きさきからポタポタと水の落ちるところはあんまり心持ちがよく

ない。

「よろしいか首屋」

「ヘイ……」

「ヤッ！」

パツと切り降ろして来る刃の下をヒラリ身をかわして飛びのき、ふところから張子の首をほうり出してドンドン駆け出した。

「コレコレ首屋、これは張子だ。そっちのだ」

「これは看板でございます」

解説

カラ 否定・打消し・強調に用いる語で「カラいくじがない」などを使う。

組合何軒 「仲間」「株」「講」などと称して、同業者あるいは利害を同じくする異種業者が連合体をもち、非組合員を圧迫していた江戸時代の商業組織は、明治維新によ

って崩れ去った。ために粗悪品が汜濫し不正取引が横行したので、十七年には農商務省布達で同業組合準則が設けられたが、大企業や重要物産以外にはまだ徹底せず、一般的には野放し状態だった。この速記は二十九年三月。

西洋小間物 洋式の化粧品、装身具。鹿鳴館風俗の影響で服装の洋風化が進むとともに、十八年の束髪会結成で髪型や化粧法も大きく変ったので、西洋小間物店は急増した。マーガレット結びのリボン、ヘア・ピン、鉛粉除去の白粉、花かんざし、婦人用手袋など。

戸隠しさま 信州の戸隠神社は天手力雄命を主祭神とするが、早くから神仏習合で戸隠権現と称し修験道の道場でもあった。だからそのお開張に天狗の羽うちわを売ったのであろう。

牛の御前 向島の牛島神社。これも神仏習合で、須佐之男命を牛頭天王とする。牛だからキラズ（おカラ、卯の花）が売れると思ったのであろう。

伏見口へ戦いがはじまった 明治元年一月、徳川軍と薩長軍とが鳥羽・伏見で衝突、徳川軍の敗退がはじまった。

山田浅右衛門 首切り浅右衛門。幕府直属の処刑役人で世襲だった。雲井竜雄・夜嵐お絹・高橋お伝らを切った八代目で終ったが、ここでは吉田松陰・頼三樹三郎・橋本左内らを手がけた七代目を指しているのだろう。武家から預かった新刀の試し切りを処刑でかえるわけだ。その

代金は十兩、急がれて順番をくり上げると三倍も四倍もとつたので、五千石旗本ぐらいの生活だったという。

折り紙 鑑定書。奉書紙・烏子紙などを横二つ折りにする。これで保証されたものがつまり「折り紙つき」である。オリカミと澄んで発音されることも多い。

番町あたり 第三卷「ちきり伊勢屋」参照。

首代七兩二分はおもしろい 七兩二分は間男代（森通内資料）の相場だから。

§

「首売り」ともいう。原型の小ばなしはすでに安永版の咄本に見えているから、古いものなのだろうが、槍は袋に刀は鞘に、枝も鳴らさぬ太平の世の事件とせず、維新動乱の渦中に置きかえたのは、円喬のすぐれた働きだと思ふ。今次大戦の直後にも、「命売ります」の札を首から下げて歩くヤケな男が現れたものだった。

それにしても、いくら売りにきたからといったって、かりにも人の命である。求めてつかわずと刀をもって縁側に出るとは、殿さまなるもの、なんと恐ろしい精神の持ち主ではないか。だから、首屋のやったことは商業的には詐欺行為であろうが、人道的にはむしろ賞讃に価するものといえよう。人命の尊さを教えようとしたレジスタンスだとするのは買いかぶりであるとしても、ザマア

ミヤガレという痛快なあと味がたのしめることはたしかである。

第五卷「万病丹」でも円喬は慶応年間の殺伐な世相と試し切りにふれて（浅右衛門の名も出して）いるが、別に「試し切り」という落語がある。「首提灯」の中にくりこまれることもあるが、一席に独立させて演じられもする。もともとはやはり小ばなしから大きくなったもので、乞食ならよからうと、菰をかぶって寝ているやつをもののみごとに真ッ二つにする、その自慢を聞いた朋輩が翌晩同じところへ出向いてバツサリやると、菰をはねのけた乞食が「だれだ、毎晩きてなぐるの？」という、これまたワサビのきいたはなしである。

「花は桜木、人は武士」に「なぜ傾城にいやがられ」とつけた江戸町人のウィットが、こうしたはなしになるとひとときわ鮮やかに輝く。

春錦亭 柳桜〔初代〕

江戸末期から明治の中期にわたる人情ばなしの真打株で、円朝ほどに華やかな人気はなかったが、江戸以来の人情ばなしの本道を伝えているような、手堅いはなし口であった。したがって、一部の人からは古いともいわれたが、その『四谷怪談』のごとき、円朝とはまた別種のすごみを帯びていた。

かの『髪結新三』も柳桜が得意の読みものであった。私は麴町の万長亭で、柳桜の『髪結新三』を聞いたことがあるが、例の鯉の片身を分けるというくだりは、芝居とちっともちがわなかった。してみると、このくだりは黙阿弥の創意をまじえず、ほとんど柳桜の口演をそのままに筆記したものらしい。ひとり円朝ばかりでなく、昔の落語家で真打株となるほどの人は、みなこのくらいの才能を所有していたのであろう。

私は明治五年に生まれたのであるから、もとより『髪結新三』の初演を知らない。五代目菊五郎の新三を初めて見たのは明治二十六年五月の歌舞伎座である。(略)

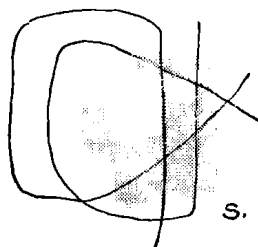
先入主の関係があるのかもしれないが、私には高座で聞いた柳桜のはなしの方がおもしろいように思われてな

らなかった。新三と家主との鯉の対話の呼吸などは、柳桜の方が確かにうまかった。こういうと、私は黙阿弥の作にケチをつけ、あわせて菊五郎と松助の技芸にケチをつけるように思われるかもしれないが、ともかくも春錦亭柳桜という落語家がなければ、この当たり狂言は生まれ出なかったであろうということだけははっきりとおきたい。落語家の柳桜は薄暗いランプの寄席で一生を終って、今はその名を記憶する者も少ない。黙阿弥や、菊五郎や、松助や、いずれも名人の誉れを後世に残している。それに対して一種の感慨がないでもない。

(岡本綺堂著『綺堂劇談』青蛙房版から、昭和十年『舞台』所載)

初代鯉かん門人から二代目柳橋に師事、嘉永五年に三代目麗々亭柳橋を襲名、のち長男の亀吉に四代目をつがせて柳叟となり、さらに「見わたせば」の古歌にちなんで春錦亭柳桜と名のつた。「なんのかんの」という口ぐせがあったという。温厚な性格で、落語組合の二代目頭取(初代は円朝)に推された。『百花園』には『大久保會我譽れの仇討ち』『大岡政談・喜八たばこ』を連載している。第一巻二九一ページ参照。明治三十年八月十一日に歿、六十九歳。

初音のお松



三遊亭圓喬

・四代目（橘家）・

よくコノ樂しみのうちにも、俚歌に、

樂しきは後ろに柱前に酒

左右に女ふところに金

なぞと蜀山人がいつておりますけれども、しかしコノ男となると、必ず婦人と遊ぶのを、これを楽しみの第一のように思っておる。また婦人もそう。女同志の話よりも、スワというときの話には、男を話し相手にしなければ、ソノ樂しみがございせん。妙なもので、女は女同志の方が話が合い、男は男同志の方が話が合いそうなものだが、これが陰陽で、女ばかりでもどうもしかたがなし、男ばかりでもしかたがないものと見えまして。

けれども、ソノ遊びどころというのは、申すまでもなく京で島原、大阪で新町、江戸にまいますとコノ新吉原。まことにはや昔も今も變りのない繁昌。けれども、どこか今は、女郎が悪くなったとおっしゃるが、花魁が悪くなったかも知れないが、お客さまも悪くなったにちがいない。昔はコノいくらか新造をもつて無心をいわせる。その無心をいわれてお金ならお金をやった者を色男とこういったもの

で。ところが今では、向うからいくらかも知らつて来なければ色男でないのですから、花魁の方でも骨が折れてまいりました。

その昔、吉原万字楼に滝川という花魁、年が十九でなかなか美人。だんだん売れて来ますから、世の中に私ほどのいい女はなかうと、少し天狗になりましたが、お客に無心をいつてこしらえましたのが、……ただいまの無心とは少し無心がちがひまして、ゴールドの指輪がよいとか、あるいはダイヤモンドがほしいとか、そんな金目の物をねだつてどうするかというと、もし年明きになったときに、しばらくは軍費に差しつかえがないというような……そんな野暮な物をねだつたのではない。なにをねだつたかという、りっぱな額を一面ねだつたので。そのころの金で三十両かかったという。

ただいま、あなたがたのご身分にしては、三十両やそこらはなんでもないものでございますけれども、そのころの三十両のお金といつては大したもの。桐の柱にして、回りに金金物を打つた大した額。それを浅草の地内に上げると、そのうわさとりどり

で。これを聞いた同じ勤めの身、流れの身で……、昔はけしからんことがあったので、女が辻々に出てからだを売ります、これを京都では辻君、大阪では惣嫁、江戸に来ると引張り、夜鷹、それがこのうわさを聞いて、

「金さん、ちよいと」

「なんだイ？」

「金さん、大へんなうわさじゃないか。浅草の地内に吉原の花魁が額を上げたつて」

「そうよ、上げたよ。花魁は花魁だけに大したもんじゃアないか」

「なんしろ、うわさに聞けば三十両かかったというじゃアないかい」

「そうよ。三十両の金がありやア大したもんだ。花魁は花魁だけに驚いたなア」

「ついでには私も一枚額を上げたいんだがねエ」

「よせよせ。花魁の向うを張つたつて、及びもつかねえ。勝つてもつまらねえし、負けりやアソラ見たことか、夜鷹ア夜鷹だけだといわれるから、よしねエ」

「なにも向うを張るわけでもなんでもない。私ア私私だけに一枚上げたいんだから、後生ごしょうだからこれを花魁けゐの額がくの下の方にぶら下げて来ておくれな」

「どれだい？」

「これだよ」

「これだ？ いけねえいけねえ。花魁けゐの額がくは三十両かかったんだぜ。その脇わきにこんな閻魔えんまの化けもの見たような、こんなものをもって行かれるものか」

「そんなことをいわないで、もってつておくれな。帰りに一合買いうから」

「ばかばかしい。よした方がいいだろう」

「いやだろうが、お頼たのみだからもってつておくれな」

「いやというわけじゃないが……、それじゃマアもってつてやろう」

いやだけれども、帰りにごちそうになりたいばかりにもって行つたが、脇わきにも寄せつけられない。いい加減にそこらにほうり出しておきますと、長者の万燈、貧者の一燈とか申して、そのうわさがだんだん高くなります。江戸は物見高いから、

「オイオイ、これだこれだ」

「なるほど、これだ」

「どうだい、大したもんだなア、花魁けゐの額がくは」

「これだ。三十両かかったア大した金目のもんじやねえか」

「その夜鷹よたかの額がくというのはどれだろう」

「向うの隅すみにぶら下げてあるのよ」

「あれか。恥はしを知らねえじゃねえか、あんなきたねえのを上げるつてエのは」

「なにか書いてあるぜ」

「エエ？」

「なるほど、なんか書いてあらア」

「お前めづ、ハナだから読みねえ」

「ちよいと一つ入れ替かわるから、お前めづ読みねえ」

「入れ替かわらなくつてもいいじゃねえか。お前めづハナだから読みねえな」

「ハナだ？ ハナだつてもいけねえ」

「エエ？」

「いけねえ」

「なぜ」

「お前めえだって知ってるじゃねえか」

「じゃアお前めえ、字が読めねえのか」

「大きな声で、友だちに恥じをかせねえでもいいじゃねえか」

「全休ぜんていふだんからよくねえよ、お前は。読めねえなら、手習いでもすりゃいいのに」

「今になってそんなことをいつたてしようがねえ。お前めえ読めるなら読んでくんねえ」

「おらアいけねえよ」

「どうしたんだ」

「目が悪い」

「目が悪わるいたって、なんともねえじゃねえか」

「なんともねえようだが悪わるいんだ。医者いしやうかんに聞いたら内障眼ないしょうがんだというこった」

「内障眼で、なんだ」

「だんだん聞いたら鳥目とりめの症だだよ」

「鳥目とりめなら今のうちは読めるだろう」

「もういけねえ」

「だって、鳥目とりめは夕がたにわとり鶏にわとりと同じに見えなくなるんだ。今昼飯を食って来たばかりじゃねえか」

「それがいけねえ」

「なぜだ」

「これは梟くろうの鳥目とりめなんだ」

「手前、あすこにお侍がいるから頼んでみる」

「エエ殿さま……」

「イヤこれは。ことのほか快晴かいせいいたしたな」

「ヘエ？」

「快晴かいせいいたしたな」

「ヘエ、とんだことで……」

「なにがとんだことだ？」

「実はここに三人揃ってやって来ましたが、三人ながら手ばつちまいまして……」

「なにを？」

「三人の者が手ばつていますので、お待さまとお見受け申してお頼み申してえのでげすが」

「なにを申すか、その方どものいうことはさらにわからん。三人の者が手ばるといふのは、手にあまるというのか？」

「ヘエ」

「そこで待と見かけて頼むというのか？」

「さようでございます」

「どういふことか知らんが、侍と見かけて頼むというからには、あとにひくことはできんな」

「へエ」

「しかと受け合つたぞ」

「ありがとうござえます」

「頼まれた以上は、おのおのがたは包み隠しをせん方がよろしい」

「へエ、なんにも隠しはいたしません」

「察するところ、おのおのがたは三人の兄弟か？」

「へエ、あの秋咲くきれいな花の……」

「なにを？」

「鶏頭でございますよう？」

「草ではない、兄弟かと申すのじゃ」

「へエ、なんで？」

「兄弟であらうというのじゃ」

「へエ、さよう、兄弟で……」

「しからば主とか親とかを討たれたので、三人揃つて敵討ちに出たところが、いま人ごみの中でその相手に出会つたけれども、向うが手ごわいから、侍と

見かけて助太刀を頼むと、こういうのだらう」

「なにもそんなことではござえません」

「しからばなんだ？」

「実はあの額の字を三人揃つていても読めませんので、あなたをお侍さまとお見かけ申して、彼の字を讀んでおもらい申してえので……」

「なにかと存じたら、ここにある額の字が読めないと申すのか」

「へエ」

「察するところ無筆だな？」

「へエ、その方の筆なんです……」

「幼年の折り、手習いをいたさんな？」

「へエ」

「今となつて親を恨むな」

「オイオイ、少し代わつてくんねエ。おれひとり叱られてらア」

「心外には思わんか」

「へエ？」

「どっちから先に読もう」

「どうか向うの花魁の額の方からお頼み申します」